

第34期小田原市図書館協議会第5回協議会 会議録

日 時：令和3年12月23日（木） 午前9時30分から午前11時30分まで

場 所：小田原市立中央図書館2階 集会室

1 あいさつ

文化部・鈴木部長

2 報告事項

（1）調べる学習コンクールの審査結果について【資料1】

○事務局説明（省略）

○質疑応答

野口委員長：調べる学習コンクールの審査委員長を6回連続で務めているが、毎年見ていると、年々作品のレベルが上がっているように感じる。過去に受賞した子が翌年も受賞していることが多いが、繰り返し取り組むことにより、調べるスキルやまとめる力が向上していることを示しているのではないかと。今回41作品の応募があったが、今後の応募数が増えることを期待している。調べるということは、新しい学習指導要領でも深い学びの一つの形として求められている部分なので、多くの小学校でも薦めてもらえるとうれしい。

武田委員：これらの受賞作品は一般の市民でも見られるのか。

野村副館長：今年は12/1～12/12の期間で児童コーナーに複製を展示した。

（2）利用者からの意見・要望などについて【資料2】

○事務局説明（省略）

○質疑応答

馬見塚委員：東口図書館に寄せられた意見・要望などで、新聞データベースの複写についてあるが、その対応状況について具体的に教えてほしい。

野村副館長：この意見は、新聞データベースの複写申込書に氏名を書いて提出することについては根拠が無いのではないかという趣旨のもので、確かにその根拠となるような要綱・要領は未整備であったため、新規に実施要領を制定した。その実施要領に基づき、複写申込書に氏名を記載して提出することについて了承いただいたところである。

馬見塚委員：聞蔵のデータベースの取扱いについても同じということでは。

図書館長：聞蔵のデータベースは利用規約が示されており、それに基づいて運用している。

野村委員：中央図書館の郷土図書について、2階に郷土図書コーナーがあるのになぜ1階で借りなければいけないのかという意見があったが、対応については前向きに検討しているのか。

野村副館長：この質問の背景として、実際には1階の閉架書架に貸出可能の本があったが、案内した職員が郷土図書は全部2階にあるはずと思いこんでいた。その図書についての所蔵確認をすれば1階閉架にあると分かったはずなのに、安易に2階に案内してしまい、その結果たらいまわしになってしまった。今年の3月に旧市立図書館から中央図書館に蔵書を移す際に、郷土資料については全て2階の郷土資料コーナーに配架する方針であったが、実際に収めてみると、元々中央の閉架書架にあった郷土資料が収まり切れない状態になってしまった。複本がある本について東口図書館に移管できるものもあるので、今後整理を行い、郷土資料は出来るだけ2階の郷土資料コーナーに一本化していく方針である。

野村委員：郷土資料の複本を東口図書館に移管するとのことだが、東口図書館は他の都府県から来やすいので、郷土図書が東口に積極的に配架されることは評価できる。

図書館長：東口図書館からも郷土資料をある程度配架したいという希望が出ている。中央図書館とのバランスを考え、東口図書館にどのレベルまで置くのが良いのか相談しながら進めていく。

北河委員：返却後に子どもの本の落書きについて連絡があったとあるが、窓口で返却された時の確認で何故気づかなかったのか。

遠藤副館長：東口図書館は、入口の返却ポストで本を返却されることが多いため、その都度確認することは難しく、対応が後に回ってしまうのは致し方ないと感じている。中央図書館でも同様の問題があり、ブックポスト等で返却された本に汚破損があった時は利用者に確認するという意味で連絡をすることはある。

飯村委員：東口図書館でリユースコーナーを設置してほしいという意見があったが、今後も設置しないということによろしいか。

遠藤副館長：東口図書館はスペースが限られ、横に細長いため、常に職員の目が届かないという状況がある。リユースコーナーは利用者が直接本を置けるので、引っ越し等で不要な本を大量に持ち込まれるケースもあるため、東口図書館での運用は難しいと考えている。現在は、一度カウンターに持ってきてもらい、リサイクルコーナーにおけるか判断している。

飯村委員：リサイクルできないと判断された本はどうなるのか。

遠藤副館長：図書館に処理を一任することを了承いただきお預かりしているので、古紙に出すことになる。

(3) 中央図書館 臨時休館中の業務について【資料3】

○事務局説明(資料に基づき図書館長より説明)

○質疑応答

野村委員：除籍の基準で、内容が陳腐化というのは具体的にはどのような図書なのか。

図書館長：パソコン関連の図書等を想定している。パソコンのOSがどんどん変わるなかで、いまだにXPのものが出ていたりする。また、社会関係の書籍で今の時代にそぐわない本等もある。一定の除籍の基準を定めているが、実際の作業としては、長期間貸出がされていないものを抽出した上で、人の目で見えて判断していく。

武田委員：除籍した本の中で、リサイクルに回る本があると思うが、中央図書館で除籍した本は中央図書館だけで回すのか。それとも東口図書館にも回すのか。

図書館長：具体的には東口図書館に相談していないが、かなりの量の除籍を予定しているので、中央図書館だけでは回らないと考えている。東口図書館でも希望があれば回すこともあり得ると思っている。

馬見塚委員：書架の配置換えを実施するにあたり、ある一定の考えに基づいて配置するというセオリーはあるのか。

図書館長：基本的には、分類番号順に並べるという考え方があって、その他に、職員の考案に基づいて利用のしやすさを考え、料理の本等の特定のジャンルのコーナー設置等の配置計画を立てているところである。

馬見塚委員：コンビニやデパート等は、商品を買ってもらうための配置の仕方があるようで、図書館にもそのようなセオリーがあるのかと思って伺った。

図書館長：セオリーというのが、今は図書館独自の個性やねらいによって自由度が上がっていると感じている。分類番号順に並べて本にアクセスしやすい環境を作るということを原則として持ちながらも、より使いやすいと思っていただけるような形を考えていきたいと思っている。

野口委員長：今回の配架の見直しは、ティーンズをどう呼び込むかとか、図書館としての利用ニーズの喚起につながるような空間づくりと連動していると感じた。これまで利用していなかった層をどう呼び込むかという視点を含めて取り組んでいただきたい。

大塚副委員長：若い世代への情報発信として東口図書館ではツイッターを行っているが、中央図書館では行わないのか。ティーンズ向けにコーナーを作るのだから、情報の発信方法を考えながらリニューアルするという考え方はあるか。

図書館長：情報発信については実施したいと考えている。東口はツイッターのアカウントを持っていて、図書館とツイッターの相性はいいと思っている。即時性があるので、このようなツールで身近に感じていただく取り組みは必要であると感じている。どの程度実行できるかは研究中だが、休館明けを目途に実行したいと考えている。

野口委員長：ツイッターを含めたSNSでは、いい意味で話題になるのは良いが、叩かれてしまうような状況になると大変である。そうかと言って情報を頻繁に発信しないと何のためのSNSか分からなくなる。その辺の難しさはあるが、どう情報発信をしていくのかを含めて検討していかなければならない。ところで、小田原市としてSNSは活用されているのか。

図書館長：ツイッター、フェイスブック、インスタグラムを活用している。

野口委員長：小田原市のノウハウを生かしつつ運用を進めるのはできそうか。

図書館長：小田原市の活用基準が出ているので、そういったものを踏まえて、他の図書館がどのような発信をしているのかを参考にしつつ、積極的かつ慎重にやっていけたらと考えている。

野口委員長：自分の知っている図書館のSNSでは日に2～3回更新があり、新着図書の情報、イベント情報等をこまめに発信している。自分の知らない情報があると図書館に興味を持ってもらえるかもしれないので、こういった情報を発信するのも一つの方法ではないか。

（４）子ども読書活動に関するアンケート調査結果の分析について

○事務局説明(資料に基づき野村副館長より説明)

○質疑応答

倉澤委員：今回の分析結果を見ると、やはり子どもの読書環境を形作っているのは親であり、家庭ということが見えてくる。現在の子ども読書活動推進計画でも家読を推奨しているとあるため、学校だけではなく、家庭でも親子で本の話に触れたり、読み聞かせをすることで読書経験を積んでいけるのではないかと感じた。

北河委員：倉澤委員が言われるように、家庭の環境は大切だと思う。ただ、親の環境は仕事中心になり、特に小さい子の親は経済的な面でも働かなければならないことが多く、親が読み聞かせをしたくても出来ないのが現状ではないか。このような状況を公的な部分でサポートしていくことも必要ではないか。

野口委員長：それに関連して、データとして子どもの貧困の問題が指摘されている。子どもの貧困は家庭の貧困だが、貧困な家庭ほど家に子どもの本が無いため、読み聞かせ等、子どもと本を結びつけるような余裕も持ちにくい。そこをサポートできるような仕組みについて、図書館や保育園、幼稚園等でこれまでも取り組んでいると思うが、どちらかというと、個別に取り組んできたのではないか。ありきたりな表現になってしまうが、もっと連携を強化していくことが重要だと感じている。幼稚園・保育園は図書室があるわけではないので、図書館として手探りになるかもしれないが、そのようなつながりを強化していくことも必要だと感じている。もちろん直接図書

館から家庭に向けてのサポートも可能な範囲で拡充していただければと思う。

図書館長：今回、幼稚園・保育園の保護者のアンケートを集計する中で、読み聞かせをしないと回答した保護者は19%であった。逆に言うと、81%は読み聞かせをしていることになる。今の保護者は本当に忙しくなっているが、その忙しい中でも読み聞かせをしようとしているところにどうサポートしていけるかを考えていきたい。

飯村委員：本を読まない理由として、読みたい本が無いというのがあるが、どのような本があるのか知らないこともあるのではないかと。前回の協議会で、学校との連携が必要という話が出ているが、小学生は学校で過ごす時間がほとんどなので、図書館からこんな本があるといったお知らせを作って貼りだすのも良いかと思う。子どもが小学生になると自分で読めるようになるので、読み聞かせの機会が減ってくる。自分が忙しい時は、逆に子どもに読み聞かせをしてもらうこともあった。

野口委員長：読み聞かせは親から子どもに限らなくてもよいのではないかと。子どもから親に読み聞かせてもいいし、子ども同士でも良いと思う。

大塚副委員長：久野小学校では、4～5年生が図書ボランティアの読み聞かせを見て、自分たちも低学年の子に読み聞かせをしてみたいと言っており、ボランティアが入れない時に実行している。図書館にもボランティアがどのような活動をしているのか把握してほしい。図書館、学校図書館、学校司書、ボランティアが連携して活動するため、集まって相談できるような場を設定してもらえるとありがたい。

野口委員長：今は図書ボランティアで横のつながりは無いのか。

大塚副委員長：以前は図書ボランティア連絡会があったが、一昨年解散しており、現在は市の教育委員会がバックアップしてくれたり、学校司書が入ったため、その方を中心に各学校で活動している状況である。

図書館長：組織を束ねるものがあればスムーズにつながるができるが、現状では難しいため、図書館としては個々の団体に直接つながることも考えている。

野口委員長：例えば、学校にお願いしてボランティアグループに図書館からの情報を伝えてもらうという方法もあるのではないかと。

倉澤委員：そういったところは是非連携を推進していただければと思う。団体を組織するということはかなり力があることなので、図書館の職員が各学校を巡回し、各学校の図書館担当、ボランティア、学校司書などと情報交換が出来れば、より子どもたちの読書の実態、課題が図書館でも把握できるのではないかと。連絡会で一堂に集まるのではなく、学校の図書館の実態を知ってもらうことも大事だと思う。学校には、学校図書館協議会があり、年に数回開催している。読書感想文や読書感想画の審査にかなり力を入れているが、子どもたちの学校図書館の取組についても、より進めていくという課題もあるので、図書館の力もお貸しいただければありがたい。

馬見塚委員：今回の分析で、毎日読書をしている方が必ずしも頻繁に図書館を利用しているわけではないことが分かった。読書したい人は自分でどんどん読書する傾向があるので、図書館に来てくれる市民の方の貸出冊数を増やすことより、あまり足を運んでくれない方に読書の楽しさを知っていただくかということの方が大切ではないか。読書の魅力をどういうふうに発信していくのかについては、色々な社会教育団体の力を借りながらブックトーク等のイベントで、こんな楽しい本があるということを発信する方法もあるのではないかな。

武田委員：読書しない原因について、家庭環境が大きな要因だと思うが、大人も読書をする人が少なくなっている中で、子どもには読書をしろと言えるのかという気持ちもある。読書を押し付けるのではなく、子どもが成長する過程で、読書の大切さに気づくきっかけを作ることが大切ではないか。その一環として、図書館がサードプレイスのような場所を提供していければ良いのではないかな。

馬見塚委員：東口図書館は子育て支援センター内でブックトークを行っており、親子連れに読書の魅力を知っていただくきっかけにもなるので、このような取り組みを活用されると良いのではないかな。

図書館長：子育て支援センターとの連携で、親が支援センターに行ったついでに図書館に寄って行くというサードプレイス的な使い方もできると考えている。また、今後、東海大学の学生が中央図書館のサインについてプレゼンを行う予定だが、そのタイミングで西湘高校の学生を図書館に招き、それぞれが交流を持てたらと考えている。

野村副館長：今まで図書館が連携を取っていた団体は限られていたが、今後は、例えば不登校児支援のマロニエ教室のような新たな連携先を掘り出し、新しい取組を模索していくことが第3次計画を立てていく中での着眼点になるのではないかと考えている。

野村委員：読みたい本が無いということが気になった。子どもの興味関心は、はやりすたりがあり、多様性があるので、決まったことに関心を持たせるのは難しいと感じている。ただ、昔に比べ、今は多岐にわたる本が出版されており、面白い本は山のようにあるということを、図書館から伝わっていないのはもったいないと感じた。

野口委員長：学校との連携という話があったが、学校側も自分の勤務している学校については分かるが、中央図書館がどのような図書館なのか知らないこともあると思う。中央図書館や東口図書館の見学会のようなものを開催するのもいいのではないかな。直に見てもらい、もっと連携して活用しようという思いになることも重要である。連携の基盤はもちろん大切だが、担い手の意識の部分はすごく大きいと思う。そういう機会を作っていくことも一つではないかな。

子ども読書推進は非常に重要なテーマだが、一方で大人も読んでいないというところもある。成人の不読率は50パーセントを超えており、中高生になり、不読率があがる

と大人になっても持続するという実態がある。読書をしない大人が子どもに読書をしろと言っても説得力が無い。ほとんどの自治体は子どもの読書活動推進計画を作成しているが、中には全市民を対象とした計画を作成している自治体もある。大人が読書に親しみ、楽しんでいる姿を子どもに見てもらうことも読書推進の原動力になるのではないか。大人の果たす役割として、子どもにどうやって読書させるか考えるだけでなく、自分も読書することもすごく重要なのではないか。

また、同年代の子がおすすめる本というのは、あまり本に興味が無い子も読んでくれることがある。自分の勤務する大学でボランティアを集め、自分が読みたい本を選んで図書館に展示をしたところ、全て借りられたケースがある。そう考えると、学校図書館では図書委員が活動しているので、図書委員が他の子たちに魅力を伝えていくような活動に力点を置く効果的なのではないかと思う。他に図書委員サミットを開催し、どのような活動をしているか発表するケースもある。公共図書館の場合だと、子ども司書という取り組みをしているケースもある。図書館を知ってもらい、子どもなりに他の子にどうアプローチできるかということを考えてもらう実践がある。電子書籍は子どもに対して賛否はあるが、電子書籍を選択肢の一つとして、読書のきっかけづくりに活用していくというのはあり得るのではないか。学校で1人1台端末が配布されているので、普段本を読まない子にアプローチできるのではないか。ただ、全部電子でいいというわけではなく、戦略的に、電子から紙の本につながるような仕掛けを作っていく必要はある。

武田委員：電子書籍化が進んでいる今だからこそ物体としての書籍の魅力をアピールするいい時期ではないかと思う。本の魅力は内容だけではなく、本のデザインであったり、本の感触等、電子媒体では味わえない魅力をアピールすることも大切である。

野口委員長：紙の書籍と電子書籍はどちらか一方だけではなく、相互に利用していくようにすれば良いのではないか。

3 その他

大塚副委員長：利用者からの意見・要望などで東口図書館が受けたことも書かれているが、東口図書館の青柳統括が協議会に出席されないのは何か理由があるのか。

図書館長：青柳統括には、年度当初の協議会に出席してもらい、委員の皆様にも紹介させていただいているが、指定管理者の職員という立場である。図書館協議会は、行政職員が委員の皆様にご意見を伺う場であり、東口図書館のことも含めて伺うというスタンスである。ただ、必要があれば青柳統括に出席してもらうことは考えている。

大塚副委員長：必ず出席してもらうということではなく、内容的に深く関わっている時にはオブザーバーとしてでも出席していただければと思ったので、お話しさせていただいた。

○事務局説明（小野主査）

- ・ 次回の協議会は3月頃開催予定。
- ・ 後日、本日の議事録の確認をお願いする。

野口委員長：第5回の図書館協議会を終了する。